けんせつのでんせつ シリーズ32

厚狭の寝太郎堰

はじめに

建設の専門図書館である当館には、土木、建築を問わず構造物の設計者や施工者を知りたいという質問がしばしば寄せられます。しかし、残念ながらこうした質問の多くは答えることができません。なぜなら、答えが書かれているはずの資料が現存しないからです。比較的近年でも設計図書などの一次資料が焼失、紛失、または破棄されている場合が往々にしてあるのです。

昔の人々も周囲にある構造物を誰がつくったのか知りたがったようで、手がかりはなくとも何とか答えを求めようとしました。そうして多少荒唐無稽でも、その時代、その土地の人々が「さもあらん」と受け入れれば、一応の答えとして伝説は生れます。

厚狭の寝太郎堰

山口県の西南部、周防灘に面した山陽小野田市の厚狭には、「三年寝太郎」が造ったと伝わる寝太郎堰があります。JR厚狭駅を挟んだ広瀬と鴨ノ庄の南北二つの字からなる地域は「千町ヶ原」と呼ばれ、東を流れる厚狭川から寝太郎堰によって取水した用水で約100haの美田がひらかれました。

JR厚狭駅前の寝太郎之像

昭和14年に山口県下を襲った大干ばつでは、厚狭郡内で植付計画面積6万6千反に対し、植付不能面積が7千反、苗の枯死が4万8千反に達し、6千戸の農家に被害がおよびました。しかし、寝太郎堰の灌漑地域は干ばつをものともせず、なんと2割の増収さえ記録しました。地元では今でも寝太郎に深く感謝しており、毎年「寝太郎まつり」を開催するほか、人形や餅や公園など、いたるところに寝太郎が息づいています。しかし、実際に昔話の主人公がおとぎの国からやってきたはずはありません。いったい、寝太郎とは何者なのでしょうか。まずは地元に伝わる話を見てみたいと思います。

寝太郎物語

庄屋の息子の太郎は、毎日寝てばかりいてゴロゴロと過ごしていたので「寝太郎」と呼ばれていました。そうして三年と三月がたったある日のこと、太郎は父親に千石船と船いっぱいのわらじをつくってくれといいだしました。なんのことやら庄屋には見当もつきませんでしたが、可愛い息子のために願いをかなえてやると、太郎は佐渡ヶ島をめざして大海原へと漕ぎ出していきました。

島に着くと、太郎は積み荷のわらじを島人たちのボロボロのわらじと交換して、船いっぱいに積んで帰ってきました。あきれる村人をよそに、太郎は大きな桶のなかで、わらじを一つ一つ丁寧に洗いはじめました。

数日後、桶の水をくみ出してみると、なんと底にはまばゆいばかりの砂金がたまっているではありませんか。そう、太郎は一握りも持ち出すことが許されなかった佐渡金山の土を、どうして持ち帰るか三年三月もの間、考え続けていたのです。こうして手に入れた砂金で堰を築き、豊かな美田が拓かれました。

隣の寝太郎

こうした怠け者が、突然知恵を働かせる昔話は「隣の寝太郎」という話型に分類され、青森から沖縄まで全国で60話近く採集されています。しかし、この話の多くは長者の娘を娶るための狡知譚であり、たとえば寝ている長者の耳元で「隣の寝太郎を聟にとれ」とささやくと、長者は神さまのお告げだと思い込んでしまうとか、夜に長者の庭の松の木にのぼり、神さまを装って「寝太郎を聟にとれ」と告げたあと、あらかじめ用意した鳩に提灯をつけて飛ばし、これを見た長者が本物だと信じてしまうなどといった話ですが、厚狭では嫁とりの話はなく、他の寝太郎とはおもむきが異なります。ここでは、どうして水田の開削者となったのでしょうか。

厚狭の禰太郎

千町ヶ原が開削された時期はよくわかっていませんが、既存の文献によれば文禄元年（1592）頃は、入海のような沼沢地だったように書かれており、この記述が正しければ開拓はそれ以降となります。

たとえば、寛永2年（1625）と貞享3年（1686）の千町ヶ原を含む地域の検地帳を比較してみると、116町ほど水田が増えており、千町ヶ原の水田面積とほぼ同じであることから、この期間に開削された可能性も示唆されます。

さらに降って寛保2年（1742）の『地下上申』には、「厚狭之禰太郎と申者吟味ニて田地ニ相成候」とあり、字こそ違えども「禰（ね）太郎」が登場します。これが何者かはわかりませんが、〝禰〟と〝寝〟は音が同じであることが、寝太郎が厚狭に腰を据えた重要な要素になったと考えられます。

昔話の伝承者

たとえば、地元に残る古文書には、寝太郎は平家の悪七兵衛景清の子孫であると書かれています。景清は謡曲などで多く取り上げられた人物で、源平合戦のあと三十七回も源頼朝の命をねらい続けたと語られています。また、頼朝への復讐心を捨てるために自ら目玉をくりぬいて盲目となった、などという話が付きまとうのは、景清を祖先とあおぐ盲僧たちの存在があったからと考えられています。彼らは、平家物語などを弾き語りながら全国を旅していましたが、多くの昔話を面白く語り、時には少しずつ改作して聞き手を喜ばしていたと柳田國男は述べています。古文書における景清の登場は、厚狭の寝太郎が誕生した背景に盲僧たちの存在があったことを物語っているように思えます。

厚狭は旧山陽道が通る地域で、都と九州を往来する多くの旅人たちが行き交いました。こうした盲僧たちが厚狭にたどりつき、各地で伝わる寝太郎物語を「禰太郎」と結び付けた可能性は考えられます。

寝太郎の登場

その後、文政元年（1818）頃の『寄題枕流亭十二勝』において「寝太郎」は初出し、天保12年（1842）の『風土注進案　末益村』には、ついに「寝てばかりの寝太郎が工夫を凝らして千町ヶ原を拓いた」という物語の原型が文書として残されるにいたりました。千石船と佐渡ヶ島の砂金の味付けは、昭和4年以前には成されており、昭和28年2月2日の朝日新聞に掲載された「寝太郎物語」によって広く知られることとなったのです。

おわりに

現在の寝太郎堰は、堰長82.5m、堰高3mのコンクリート堰であり、旧寝太郎堰が昭和34年の洪水で崩壊した後、昭和38年に完成しました。旧寝太郎堰は「古典的な土木工法の集大成」と称され、土と木と石のみで造られた文字通りの土木構造物で、随所に建設者の英知が見られたといいます。明治十年代に造られた可能性が高いのではないかと考えられていましたが、大洪水で流されてしまった今では、旧堰についての多くは謎のままとなりました。旧堰以前については言わずもがなで、人々の命を繋いできた大事な構造物の史料が、なんら残されていないのは大変残念なことだと思います。

現在でも、多くの構造物の設計図書が廃棄されており、識者の間では懸念の声が広がっています。学会などが中心となって保存の呼びかけを行うなど、後世への貴重な遺産として何とか残す手立てを講じていただきたいものです。

（文：江口知秀）

現在の寝太郎堰